

ソーシャルワークが働きかける“環境”とは何か

一人一環境のソーシャルワーク実践を中心に

渡邊 英勝

What is the "environment" that social work works on?

Hidemasa WATANABE

1. はじめに

ソーシャルワークは、は常に、“人びとを生活の主体者として捉える”という視点で関わる。

ソーシャルワーカーは、生活に関するさまざまな問題を「人と環境との接点への介入」という視点を持つ。

ソーシャルワークは、人と環境を一体として捉え、ソーシャルワーカーは、システムの修正や開発を試みる。

ジャーメインが提唱した「生活モデル」という理論をもとにしたソーシャルワークが主流になっているが、「システム理論」「生物学理論」「人と環境の交互作用」という3つの理論が成り立っている。その中で、「人と環境の交互作用」とは、互いが影響を受け、互いが変化する関係のことで、「環境」は「個人」に影響を与え「個人」を変え、「個人」も自ら「環境」を変えられる存在である。生活モデルソーシャルワークは、問題の原因を人と環境がお互いに作用し合うものとしてとらえ、ソーシャルワーカーが個人と環境の接点に介入して支援を行うことになる。

リッチモンドは、1922年『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』の中で、ケースワークを「人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」と定義し、「社会環境」という用語を用いた。

スーザン・ケンプ、ジェームス・ウィタカー、エリザベス・トレシーは『人一環境のソーシャルワーク実践』の中で、ソーシャルワーク実践の焦点は人間を中心とする「過度に個別的なアセスメントに没頭している」とし、「個人」に関心が多く向けられ、「環境」

については関心が払われてこなかったことを指摘している。本論では、『人一環境のソーシャルワーク実践』とジャーメインの所説を中心にソーシャルワークを行う時の「環境」を常に意識しながら実践を行えるように、ソーシャルワークにおける「環境」について整理していく。

2. 先行研究

河野真寿美・岩間伸之の『エコロジカル・パースペクティブと「状況の中の人」ーソーシャルワークの固有性の検討ー』では、ソーシャルワークの重要概念である「状況の中の人」について、ソーシャルワークが持つ対象把握の特質を明らかにしている。

まず、リッチモンド、ハミルトン、パールマン、ホリスの4人の見解を概観している。

リッチモンドは、は、ケースワークを「人間と社会環境との間を個別に意図的に調整することを通じてパーソナリティを発達させる諸過程」と定義し、彼女の研究はケースワークの基礎を確立したのと同時に、「状況の中の人」の重要性を初めて論理的に示すものであったといえるとしている。

ハミルトンは、理論の根拠を本質的には精神分析に求めているが、「ソーシャルワークは常に心理社会的事象の概念と照応するものであるが、人間をその日常生活の中で援助するというソーシャルワークの伝統的役割に合致した新しい見通しと治療の機会を絶えず見出していると述べ、人と状況の全体性の一部に変化が起こればそれに連動する形で他の部分も変わってくる」という考え方は、今日のシステム理論にも通ずるものであるとしている。

パールマンは、人 (person)、場所 (place)、問題 (problem)、過程 (process) の「4 つの P」を中心にケースワーク論を試み、ケースワークの過程を人間の生活状況に動きと変化を与えるものとし、「状況の中の人」というソーシャルワーク独自の視座に迫っているとしている。

ホリスは、は、ケースワークの中心概念を「人、状況、両者の相互作用」の 3 つの相互関連性からなる「状況の中の人」として位置づけ、その相互作用が極めて複雑なものであり、「人」と「環境」との関係は単なる作用と反作用の因果関係によるものではないと指摘し、「状況の中の人」という視点の重要性を明確に指摘する、としている。

ジャーメインはライフモデルにおいて、「ソーシャルワークは「状況の中の人」という概念をもち、歴史的には人と環境の両者に関心を向けながらも、その概念的架け橋がなかったために人か環境かという二者択一的な焦点づけしかできずにいた。そしてその焦点づけは、ある時は「人」へ、ある時には「環境」へと両者の間を行き来していた」とし、ライフモデルの主要概念を通して「状況の中の人」について再度検討するならば、「個人と環境との力動的一体化」と「主体的存在としての本人」の 2 点の特質が明らかとなる、としている。

村上 信の『ソーシャルワークと環境』では、ソーシャルワークと環境について、多くの場合無視されてきた自然環境 (物理的環境) に着目して考察を加えている。小島蓉子のジャーメインの所説を整理した、人間にとっての「環境」の意味をまとめた図を紹介し、この分類に則って考察を進めている。そして、①人間環境、②社会環境、③自然環境 (物理的環境) の 3 つを示している。特に自然環境は「原植生 (人間が影響を与える直前の植生) と里山 (手入れ)、里山は原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域であり、自然環境は「自然環境」 natural environment と「作られた環境」 built environment の両方を含んでいる」としている。

ソーシャルワークは一貫して人間環境や社会環境を重視し、自然環境については、単なる「資源」としかあまり関心を向けてこなかったとし、人間環境と社会環境は、拡大してみれば自然環境と重なっており、究極的には地球全体をひとまとまりとしてグローバルに考えることもできるとし、ソーシャルワークにおいて、

自然環境についても重要視することを示唆している。

井上健朗の『ソーシャルワークにおける「場」の概念—パールマンの「場」を出発点に—』では、パールマンはソーシャル・ケース・ワークの構成要素として「場 (place)」の概念を挙げたが、以降、ソーシャルワークにおいて「場」の概念がどのように扱われたかを探求している。ソーシャルワーク論において、パールマンが力動的なものとして取り扱おうとしたケースワーク論における「場」の概念に近く、一般的に考えられる「場」の概念に近いものは「状況」と「環境」ではないだろうかとしている。

友愛訪問の活動からケースワークを体系化したリッチモンドは、ケースワークを「人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」と定義し、この時代からソーシャルワークは「環境」という言葉を使用してとする。ジャーメインは、生態学を援用しつつ、「環境」を物理的、文化的、社会的な側面を持つものとして定義し、ソーシャルワーク論の捉える「環境」の中で物理的環境を見落とすことなく、さらに「空間」と「時間」という用語を用いて「環境」の持つ多様な側面と力動性を持論に織り込んでいるとする。

ピンカスとミナハンは「環境」について、「物理的環境」と「社会的環境」と分け、「物理的環境」を「人々が相互作用しあう場の物理的属性」、「社会的環境」を「人々の相互作用を操作するアクション・システム (社会資源) の活用や、活動への参加、または規範・規則から成り立っている構成物」と説明したと述べている。

「場」の概念は、地形や気候など自然環境や物質の形状や建物や構造などの「物理的環境」の側面と人の生活の中で生成されてきた文化的、制度的、社会的、個別的な「意味的存在」の側面の 2 つの要素として扱われており、パールマンが主張したように「場」を「力動的」なものとして捉える必要があることが理解された、としている。

戸塚法子の『ソーシャルワークにおける「人と環境の相互作用」について—あらためてこの基本概念を問い直す—』では、Environment で表される「環境」とは、人から区別され、人と相対する周囲の事物を意味するものとして規定され、他方、19 世紀に生物学に適用され「中間」「媒介」という意味あいを含みもつ Milieu という語で表される「環境」という言葉がある

とする。この Milieu としての「環境」は、Environment としての「環境」とは異なり、「主体である人間を内に含みつつ、人間でも自然でもないがゆえに人間でも自然でもあるような、人間とある程度まで一体化した、人間と自然の『不一不異』の関係性である」とし、ソーシャルワークアセスメントやプランニング、アクションといった基幹的な支援局面を中心に大きな違いが現れて来ることは必至であるとする。

以上のように「環境」についてそれぞれの研究を追ってきた。リッチモンドや、ジャーメインなどがソーシャルワークにおける環境において言及していることは共通しているが、そもそもソーシャルワークが対象とする環境とはどのようなものなのかについて、詳細に整理しているものは少ない。

3. ソーシャルワークにおける環境とは何か

スーザン・ケンプ等が著した『人—環境のソーシャルワーク実践』から環境とは何かを整理していく。

ソーシャルワーク実践の基本的構成概念として、「環境の中の人間」が中心であるにもかかわらず、「環境」よりも「人間」に多く向けられていたとし、本書はこの不均衡を是正することを試みている。ソーシャルワークが、人間を中心とする、過度に個別的なアセスメントに没頭しており、環境（身近な環境と遠い環境）の考慮無しに、アセスメントが行われているとしており、本書では、歴史的な視点からの環境介入についても、整理している。

1890年代後半から1917年アメリカ第1次世界大戦までの時代は、個人と環境への二重の焦点づけは、ソーシャルケースワーカーとソーシャルセトルメントワーカーに共有されており、環境状況に関する認識は非常に鋭かったとする。

1920年代は、第1次世界大戦後、貧しい家族問題の多くは、ケースワーカーがほとんど解決できない感情的な後遺症を伴うようになり、ソーシャルワーカーは心理的な処遇に関する知識と技能を熱望するようになったとし、ソーシャルワークと精神医学、とくにフロイト理論との関係に強い関心がもたれ、環境志向する実践から離れていった。そして、政府の緊急救済法やニューディール政策により物質的救済提供の責任から解放され、ケースワーカーは心理的な処遇の技能を発展させることに専念し、環境を志向する実践の格下げをより深め、強調したとしている。

1960年代のアメリカは、公民権運動、女性解放運動、

ケネディ大統領の誕生と冷戦、リンдон・ジョンソンの貧困撲滅運動、ベトナム戦争など、社会不安が頂点を迎えており、ソーシャルワークは深まる社会不安に迅速に対応しなくなっていたが、改革を望む人々が、人中心のソーシャルワーク実践の妥当性を社会に指摘した。ソーシャルワーカーたちはソーシャル・ケース・ワークに対する批判を受け入れて、コミュニティオーガニゼーションやコミュニティ開発といった他の実践モデルに着目するようになったとし、少しずつ環境にも目を向けるようになっていった。

環境とは何かという定義について、キャロル・ジャーメインは「物理的環境は自然界と人工的世界から成る。社会的環境は種々の組織のレベルにおける人現関係のネットワークから成る。双方の環境は、社会的相互作用をパターン化し、物理的環境をどのように活用しかつそれに反応するかを決定する。文化価値、規範、知識、信念から影響を受ける」と定義し、大きく「物理的環境」と「社会的環境」の二つに分かれるとしている。加えて、物理的環境と社会的環境の双方は時間（生物的、心理的、文化的、社会的）と空間の織り合わせによって形作られるとしている。

スーザン・ケンプらは、ジャーメインの環境についての定義に以下の考えを付け加えている。「・知覚された環境、すなわち、意味と信念の個別的、集合的なシステムにおいて構成された環境・自然的、人工的双方から成る物理的環境・社会的、相互作用的環境。おもに親密度の異なる人間関係から成り、家族、グループ、近隣ネットワークと集合体を意味する。・制度的、組織的環境・文化的、社会政治的環境」

さらに、環境アセスメントを「クライアントとワーカーが協働して、多様なレベルの環境と交互作用を持つクライアントとクライアント・システムについての情報を集め批判的に分析する、進行中の過程である。情報には、リスク、課題、関心のある問題と同じく、長所、資源、可能性、機会が含まれ、クライアントが経験する環境の意味に注意が払われる」としている。

そして、環境介入については「環境における行動、および環境条件が与える影響力の批判的分析をとおして個別と集合の視点を変換させること」としている。

考 察

『人—環境のソーシャルワーク実践』を概観し、「環境」についての再確認を行ってきた。

ここで、筆者なりの環境とは何かを考察し、整理し

ていく。「環境」は大きく、「知覚環境」「人間環境」「社会環境」「物理環境」「文化環境」「自然環境」の 6 つに分かれる。

「知覚環境」は、意味と信念の個別的・集会的なシステムにおいて構成された環境である。主体が知覚し認知している環境のみが、その主体にとっての環境である。個人・家族・グループ・コミュニティは環境をどう経験しているか。人間関係、家庭、社会的位置・身分、地域空間などの変数によって経験にどう影響しているのか、主体の経験と認知も環境として捉える必要がある。

「人間環境」とは、ある主体にとってその生活の中で関わりを持ち、影響を与える人たちの総体を、その主体にとっての人間環境という。分類としては、二者関係、家族、近隣、グループ、コミュニティとなる。

「社会環境」とは、社会における人々の生活に影響を与える外部の状況のことである。分類としては、政治・社会体制、経済的環境、法律・行政的環境である。さらに法律・行政的環境は、医療・保健システム、教育システム、住宅システム、司法システム、労働システム、交通通信システムに分類される。

「物理環境」とは、場所、距離、構造物といった環境で、主に「場所」で影響を受ける環境である。分類としては、建物、交通、地勢、空間、空気・光・音・熱・放射線、通信（インターネット、SNS、IT）、メディア利用（コンピューター、ロボット他）である。

「文化」とは、人間が生きる過程で学んで身につけたもので、人間の生活様式全体がパターン化された行動をいう。「文化環境」とは、文化を育むその土壌・基盤となる場所・空間・条件などである。分類としては、芸術、宗教、レクリエーション、ファッション、言語、趣味、食生活である。

「自然環境」とは、人工によらない、自然由来の構成物により形成される、人の手が加わっていない環境をいう。分類としては、光、温度、待機、水・河川・海、土壌・山、森林、生物、天気である。

1980 年代のジャーメインの述べた環境や、ケンプが付け加えた 1990 年代の環境に加えて、現代社会における、インターネットや SNS を加えた。SNS の種類は、文章投稿型、コミュニケーション型、写真投稿型、動画投稿型、ライブ配信型、ビジネス特化型の 6 つに分類されるが、現代社会において、SNS はコミュニケーションツールであり、情報伝達のメディアでもあり、

インフラでもあり、共通の関心を持つ人々のコミュニティでもある。SNS の展開が現実社会へ与える影響が拡大している。

おわりに

ソーシャルワークにおける環境について、私たちがソーシャルワーク実践時に考えなくてはならない環境とは何かについて、整理しまとめた。

そして、私たちは、たんに物理的な環境の中で生きているのではない。歴史を通じて過去から継続している社会・文化という環境のなかで生きている。また、一人ひとりが経験してきた社会や空間に対する知覚や認識はそれぞれ違っている。人々を支援するときには、知覚環境を意識して、しっかり環境アセスメントを行う必要がある。

文 献

- (1)スーザン・ケンプ、ジェームス・ウィタカー、エリザベス・トレシー著 横山 穰、北島英治、久保美紀、湯浅典人、石河久美子訳『人—環境のソーシャルワーク実践 対人援助の社会生態学』川嶋書店 2000
- (2)檜山 尚・武田 丈『人間行動と社会環境 社会福祉実践の基礎科学』ミネルヴァ書房 2000
- (3)河野真寿美・岩間伸之『エコロジカル・パースペクティブと「状況の中の人」—ソーシャルワークの固有性の検討—』大阪市立大学生生活科学部紀要 第 47 巻 1999
- (4)村上 信『ソーシャルワークと環境』淑徳大学院研究紀要 第 23 号 2016
- (5)井上健朗『ソーシャルワークにおける「場」の概念—パールマンの「場」を出発点に—』東京通信大学紀要 第 5 号 2022
- (6)戸塚法子『ソーシャルワークにおける「人と環境の相互作用」について—あらためてこの基本概念を問い直す—』淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究No.21 2017
- (7)小島蓉子ジャーメインの所説を整理した人間にとっての「環境」の意味をまとめた図 1 (小島 1992 : 221-241))
- (8)正木大貴『SNS は人間関係を変えたのか?』京都女子大学現代社会科論集 013 2019